

孝子記談

九

函	番	號	111	號
種	別		國	
種	別			號
購	入	日	3/13	日

919.5  
338  
Vol. 9





常山紀談卷之九目次

一 黒田家波井谷合戦の事 名カケキキタニ 并小川傳右衛門聖村太郎之湯使并

友房を斬る事 トモフキ

一 豊吉関白小條征伐出陣の事 トヨトミノケハクホウダウセイバウ 附本多重次放言の事 シゲツカハダゲン

一 井伊直政関白を討んと言まう事 ナホトサ

一 鳥井源八郎先登士志を論まう事 トリノチ

一 南部越後攻口の事 ナニノベ

一 上様日和といふ事 ウサマヒヨリ

一 伊奈熊谷兵糧を司る事 イナ

一 蒲生氏郷の陣夜討の事 カミフウノサト 并氏々金の三階葦笠は馬印を免 キミサカイスカサハ

一 まう事



一 武藏國八王寺城落る事

一 大音菰菰雨森彦三郎功名の事

一 信雄卿那須と諫せしむる事

一 坂部岡江雪免る事

一 関白鶴ヶ岡参詣の事

一 関白宇都宮より佐野天徳寺とお徳の事

一 蒲生氏に大志の事

一 奥州葛西大崎一揆の事

一 蒲生家の士大將軍兵調練の事

一 氏郷伊達家の刺客を免さしむる事

一 氏郷佐々木が鐘を細川忠興より贈る事 附 黒塚の歌の事

一 本多忠勝万喜が奮力を呼出されし事

一 東照宮武田小條の跡御制度の事

一 東照宮武田の舊書を召て所物語の事

一 東照宮物具の御物語 附 小形木笠の事

一 秤御定の事 附 一步金弁當秩箱始の事

一 酒井金三郎本を忘るる事

一 成瀬正成忠信の事

一 東照宮相摸塲御おりの事

一 豊七関白五腰の刀此主を察せしむる事

一 竹俣兼光の刀の事

一 本庄正宗の刀の事







一揆起合せ七八人取立て馬より突落したり後藤又も場  
小河傳右馬久野四郎傳のそとを引起し敗れし長  
政の馬廻りハ真丸よめて一揆練よ事押詰られも鎧を合せて一  
揆ハ本谷谷かげより五人十人かけ出狩場の麻を射るる  
竹の鏝に矢をく雨の降松よ射りたりと長政馬より下り立  
討死せし色なりしを近習の考たりし一揆乗せ退きられを  
一揆頗る追うけたり長政は馬矢の中よりバ爰まで自害せ  
んと云まを菅六も政利已がころふ刃まへへとつへともす  
入る早上帯をぬんとせられるを三宅三左夫後ハ大将の  
自害の少くはれいばとてかき抱き馬に打のせ片も馬を  
牽き片手は長政をとめて我亦生残りし殿を退け

念もなかり地の利を分て引返し一揆の攻系追崩し中さんと  
て引返く爰ハ長政の鞆乃組遠ひしをわけて少も離れ  
木屋兵右馬ハ長政の鎧を持て歩立まで降たり一揆長政  
と見知り餘さしと付慕ふ三宅茂木屋を始とて四半路兵  
衛小河久夫坂本七左馬下五十人計九く成るる切も毛  
を分て静に詰害て二里計退けく其後ハ慕ハさうりり  
後藤ハいもさうりり人狸々緋のお織を脱捨きりしを長  
政くせ帰らむらわ

後藤度々の武功あり一万余石与へ小隈の城より後  
よ岐井谷に軍お強よ及べハ俄に病出るとぞ木屋兵右馬  
ハ長政に向ひ後藤小河をさし大臍病の男よてんを親子







非もあらば事よんささるりの者成小弁を捨殺し殿をも捨く  
逃すりうらぬ殿もよ記討死のふりてゆひま何とて敵後を  
見せらるや父祖の高名小瑕付やこそ口惜けれ善七郎がはるの  
傍に在れぬ鎧を合せ一揆に奴原追まき引取べたも後者  
めらまきさるるに振也よらつたや重て一揆と軍たらんよ必死と  
思召定めらるる座を立ちまき長政も誓をたらしひひ  
切手ら休まり翌日善七郎又やうらハあまぐち口惜となせられ  
ゆひそ一揆押寄ゆらまき先かけく切崩し耻を雪だる人善  
七郎ハ御馬の先まき討死せん逃まき奴原も励まされく軍さる  
むらなるるに鬼神なりとも恐るるふ足むと云慰められ長政  
起上り物語せられまき長政ハ面目たうとて父の前よ出に孝隆  
御

ハ必死を期しとてまき老功の老作多長政も差添て  
やアア下知を禁せられく一揆又上毛郡へ押寄られ長  
政火隈の海近きふれ山より待かけくとも園小引受一同小急  
出馬のかけ場よりまき縦横に兼割一揆敗小すれを  
追立より鬼木塩田などよ者討まきあふふゆらるるを長政  
塩田内記をよつら討取尚もかんとせられく老作も  
馬より飛下り押へく陣を越えり塩屋善七郎ハ敵の中ふ  
乗入鬼木掃然くまき右の方を見まき長政敵に首をまき  
アアハ又馬引寄打争ふ追詰て首二ツ取り痛手負て精神も  
乱まきさるるが尚も若殿の功名を問けて嬉しや先日恥辱を雪  
がせまひぬ此上ハおひし事なりと云く長政善七郎が枕



元子居よれし長政の手をやり此後能心得る殿付  
死しよんと者ある事よんと云バ長政涙を流し汝を先  
きつらるるの残多きよと咽たるれば善七眼を忍死先の頃  
諫めやせしハ必死を思ひ定めしゆある今度の高名こそ  
めでたけれ今生の御目見只今を限りあり人ハ一代名ハ末代と  
するみいとしいも終らざ空しくなるこそ比類なき老な  
ア云らるる日孝隆火隈より対面し若た若ハ懲る  
事なりとハ思慮の練ぬりのぞり終の勝を計し只勝べた  
とめし思へハ敗を取らり良将ハ時より緩み見ゆも卒  
余は軍ハせざるゆある終の勝を合しきよと教へらぬ  
長政又押参んと云まを孝隆制して要害を設け兵糧は

道を塞ぎ馬の岳より啼らまきり斯て一揆かひ盡れば毛利  
輝元を頼み和平しされども友房ハ病ひて中津川より  
三宅二大夫岐井谷より傳法寺兵使使者往来して互に拘  
りたり或時三宅云々ハ友房内室なり勤め由妹あり  
誓禮ありバいふと云傳法はちまハ悦し事あり能むりハ  
まんやといふは三宅はも年若けれバ老人と相計てこそといひ  
り傳法寺ハ敵の妹を人質と取人ハおとすや思ひまん  
りりなく三宅を頼みたり三宅我主君の心をもあを容易し  
も申出さる我事調ふハ面目もゆりてをいひく長政は  
告て孝隆も告遣りハ密謀をとり三宅は孝隆書を写し  
縁を結ぶハ末頼母した事なれども例の扉勿心かへんと







小川もよみく聴入まじりしとぞ羨<sup>カシ</sup>なり

○秀吉北條を討つ時諸将浮島が京に並居て秀吉をまつ  
秀吉系緋威の物具として唐冠の曹黄金をちりちり  
太刀佩て土俵に大立ち羽<sup>ウツボ</sup>一征矢一筋指仙石權を  
らせし朱<sup>ニシ</sup>に滋藤の弓持七寸ある馬に金の瓔珞<sup>ウツボ</sup>を  
甲<sup>ヨロヒ</sup>かけ影<sup>シヅカ</sup>の歩<sup>アユ</sup>をせてお通らまじりしが  
東照宮信雄と  
共に出<sup>トモ</sup>途<sup>ムチ</sup>ひまをえて馬より降りいふ武心<sup>フタココロ</sup>もよみく  
いざ一太刀系んと太刀柄<sup>ツカ</sup>もよみを懸<sup>カケ</sup>らる  
東照宮左右  
の人に向<sup>ムカ</sup>せ給ひ軍始<sup>イクサハジメ</sup>も太刀よよを懸<sup>カケ</sup>れ門出<sup>カドデ</sup>の目<sup>メ</sup>お  
ゆと高<sup>タカ</sup>らく仰<sup>オホセ</sup>有<sup>アリ</sup>れば秀吉何<sup>ナニ</sup>ともい<sup>イ</sup>はれし又馬<sup>ウマ</sup>にお繋<sup>ツナ</sup>  
通<sup>トホ</sup>らまじり

秀吉此出陣の時濱松に宿せしり多作  
左衛門折<sup>オリ</sup>津使<sup>ツツシ</sup>も系<sup>ツ</sup>り帰<sup>カヘ</sup>りて装<sup>ソウゾウ</sup>装<sup>ソウゾウ</sup>の俣<sup>ヒ</sup>  
よく諸将<sup>シヨシヤウ</sup>れ中<sup>ナカ</sup>進<sup>ス</sup>り出<sup>デ</sup> 東照宮をんかけ奉<sup>ホウ</sup>  
りていふ殿<sup>ト</sup>ハいつりかく愚<sup>オロカ</sup>なる人<sup>ヒト</sup>もや國<sup>クニ</sup>を  
持<sup>モ</sup>つ人<sup>ヒト</sup>に城<sup>シロ</sup>を人<sup>ヒト</sup>よかせるやいさう<sup>イサウ</sup>バ女房<sup>メウバウ</sup>も人<sup>ヒト</sup>よ  
か<sup>カ</sup>しめしん<sup>シ</sup>りと怒<sup>イラ</sup>罵<sup>ノノシ</sup>りたる 東照宮彼<sup>カレ</sup>ハなみ作  
た恋<sup>コイ</sup>のと申<sup>カク</sup>剛<sup>カウ</sup>の者<sup>モノ</sup>もくひが家<sup>イヘ</sup>久<sup>ヒサ</sup>しく眩<sup>クワシ</sup>くそ只今  
のやうあることを申<sup>ス</sup>すては無<sup>ム</sup>礼<sup>レイ</sup>の詞<sup>コト</sup>を中<sup>ナカ</sup>ゆと仰<sup>オホ</sup>有<sup>アリ</sup>  
なれば人<sup>ヒト</sup>々<sup>タタ</sup>系<sup>ツ</sup>り佐<sup>サテ</sup>ハ形<sup>カタ</sup>り及<sup>ツ</sup>びし本<sup>ホン</sup>多<sup>タ</sup>後<sup>ゴ</sup>よてゆか  
けしよか<sup>カ</sup>し事<sup>コト</sup>ヤ人<sup>ヒト</sup>多<sup>タ</sup>くもよみくやと賞<sup>シヤウ</sup>しあへり  
作<sup>サシ</sup>左<sup>サ</sup>衛<sup>ヱ</sup>門<sup>モン</sup>抱<sup>ダ</sup>あ<sup>ア</sup>り人<sup>ヒト</sup>なりし三<sup>サン</sup>奉<sup>ホウ</sup>行<sup>コウ</sup>の中<sup>ナカ</sup>よ命<sup>メイ</sup>







○小田原を囲む時國清公の攻口ハ搦手此山此上なり目の下  
見おろし鉄炮をお入る小城中よりあげ矢小つ鉄  
炮烈しく士卒進み兼く時南部越後銃口を空へ向て  
打せしり其玉雨の降がめくたりしは城中ひびく音を  
見洩し鉄炮を山をれおろし透回なくおせて攻破せり  
○同時九鬼大隅守嘉隆日本丸といふ大船を乗せ南の海上  
を取巻かり此所ハあつた東風吹時波浪山嶽を倒  
しかくるがめし船をかけ並事田思ひもよめ取たりし  
秀吉城をかこしれし間五十餘日風静し波穏なり是より  
して小田原海辺風多き日を上様日和といひたりし  
○同時 東照宮伊奈熊藏を召し仰出さる事どもいり

其時伊奈去年より兵糧の用意して沼津と運びきたり  
然るに菅根山中穀物の價江尻沼津とお同し遠く運  
漕せんより爰まで求る事ゆるべし心得がたなりし  
を 東照宮伊奈名夫ハ長束大藏大輔が謀り長束  
ハ武功備まるともあざれども斯くは長束の者な  
まは秀吉城主とて罷せしむぞか 汝が職あり兵糧  
運漕の事よくおぼし心得がたなりしハ吾も心得が  
と仰みたるに伊奈汗を流して退出し  
○同時蒲生氏郷金の三蓋菅笠の馬印ゆるされし  
し秀吉音まはすやと佐々成政が印をとりし免し  
がし今度小田原ハ武功よりしるしむるまはせし  
九ノ九



いとまじりくバ氏郷今夜の軍小人の目を驚うけりさうに  
ハ討死とおひひ定め繪像をかかせて日野の菩提寺に籠め  
打立まらざる勢で五月三日此夜かき曇りて終まじ城中  
小條十郎氏房が持口より夜討を〜りり氏も今夜ハ  
夜討入べきよ懈るまると下知せられ〜小果〜して廣澤兵庫  
秀信助重 大将として押寄り氏々の物見の兵町野万を去  
よ仍るぬ弓取直〜指詰引詰射々々〜叶い〜して引  
返せば敵進み来り柵を木を打破る蒲生源左多う成田丸  
中務直政町野右近幸和切〜出爰を〜途と戦ひりり氏  
郷銀の餘れ尾の曹は流を〜め  
氏々の許は新は仕り士小吾家少く銀の曹を〜

兵度ごとく小真先は進みゆく働きたり此男は芳らむ  
あ〜と〜と云ま〜り氏に彼曹着て毎も先かけ  
らま〜とぞ

兼て一丈餘の鎧を設け置き〜を提げ追立〜進みれ  
々々不度伴兼て銃炮を後陣に並べ置れば追来るまを  
打立り度沢ハ聞ゆる劉の者たるが鎧を横より片足を堀  
の中へ踏入ると大音上一鎧あ〜んと呼ぶを氏に呼んで飛か  
ア突合々々バ蒲生左衛門に可回五郎を場ハ治佃又を走ホ  
かけ来アをめさ〜んで攻戦ふ度沢ハ今宵夜討の大ね  
廣澤兵庫一番鎧と高らうに呼ぶを氏に目ふりけ  
く堀の中へ飛入て撃つ〜んと面もあ〜と曹の鎧を破け



鎗をえ延きとくまき立らまじりて敵兵二人氏々の鎗を取んと  
ささるり七八度及びしは氏々の廣原をバ付もさされり  
寄手鎗うまげし戦ひ多れば廣原もかたさるりと云ふ  
ん城をさし引退く氏々のうづくまでのも云ふ先小進  
んで追まじりし門を閉て鉄炮を拵かせバ引返されし  
曹ハ矢二筋折る物具は鎗の疵透間なく十文字の鎗さ  
ささるのめくむりしハ秀吉感状よかの馬印免ささるり  
○武州八王寺の城主小条陸奥守氏昭ハ小田原より来て家臣留  
守しささるり前田利家上杉景勝攻むとて先降参し  
る小条氏邦は使を城へやせ小田原既破まぬとて城  
を渡ししと云送る中山近藤将野ハ後ハ氏昭降参せば

證書を賜りし城をささるり下知さるり然らざりて降  
参せ巴士の瑕瑾之氏邦がめし眩病者ハ一人も城中より  
とさへたり利家景勝も其義は感ずるといども扱止へり  
ざれば一万五千の兵をもて圍まじり甘糟清長攻入て火を  
かく將形一菴近者お助実金子三郎右衛門家重死狂ひ  
切て出討死を横地監物ハ氏昭の弟一北長臣あり火の上  
まじり今日を限アふさるり戦ひしは家臣討く者多し  
中山勘助由家範ハ武勇のお侍ハ八条修理滿朝が馭法を  
傳く関東毎双と世は称せし人なり大敵より少しもひれ  
やうじて二百討りし突く出爰をさるりと切て出さるり  
手を入替攻りしハ僅十五六人討たされり利家難く中山



ありありあると伺ふ松山の降人根岸主計定直が妻ハ中山が  
妻と兄弟あり小岩井雅樂助ハ中山が馭法の弟子あり  
そ中利家疾中山は味方は属せしむるべしとて兩人を城  
中へ入らまらば中山既ハ自害して其妻も自害してさうがま  
ぶ息かりて有さまバ詞をかきして弛帰マ妙といハ利家  
大ニ愕然れりり監物ハ切ぬけく逃出たり小條家関東の  
城々多しといども豆州葦山の城は亦ハ多ク降参りたる  
ハ八王寺の兵城を枕し戦死せしむるを 東照宮マ一召  
其義を感じ思召ま中山の嫡子助六郎昭守二男左ハ信吉  
禄賜り昭守が子信守水坂の軍ニ功有信吉ハ後水戸中納  
言小仕へく備前守と稱し持燈一庵が子主膳も仕へりり

○八王寺の城攻ふ城兵切く出死狂ひとし利家の小性大者  
藤原一番首を取きしは是ハ兩木林三郎後て首取利家  
の前よりく実檢は備ふ一番ハ大言ありとて三木首の  
帳は記させしむるを利家大ニ歎せしむ其比大者ハ利家の勤  
氣を蒙り居しむる教度亨吉ハ姓名を名あしハ諸人  
一番乗といひしむるを知りり

○北条比びく後秀吉石垣山の本陣に諸將集りて酒宴ハ  
及ふ時信雄ハ舞の上より笑あつて一曲就て交と秀吉  
いふ信雄吾を侮ると口惜くやめらん不吉の詞を  
舞いしむる秀吉かきしむる悦の中に思ひし事ども心得  
とて那須は追やせしむる時やぞ十條將の士を具



せしれしは僅に打連て那須に赴きぬ時を計らば勢ひ  
を知ら無益の事とて小國を失たまひしるのうとてさよと  
人これのいひあり

○小條滅亡の後秀吉坂部岡江雪齋に汝先年小條の使と  
して上京し約せし不忽背て名胡桃の城をえり氏直の  
毒計もや又汝が詐なりと責問し不直よやさんと答へし  
うば秀吉大に怒り手枷足枷を並べ江雪を呼出し刀を  
奪ひえ左右の手を引張庭上より居て後秀吉罵く曰汝  
が約せしを不背くこと誠は憎むは降るを且日本國の兵  
を動し主君の國を滅せし事汝に於て快きやと諷ら  
しむ小江雪色も変せし氏直更に約し背くの心あるを

郡の士愚して名胡桃をえ終に弓矢も及て小條の家止む  
ぬ事江雪が思慮いんともさぐり根のゆりぬ滅し家の止  
ぶべき運命もやらんあまきと日本國の兵に引受るこや  
小條家の面目なり此外すべき事あり疾を刻られんへ  
し小秀吉顔色赤とけて汝に京より上せ磔し死せむ  
し小大言を吐く主君を辱しめと大丈夫といふべし命  
を助ん吾よ仕へしとて許されたり坂部岡を改めて岡と稱し  
くは此時よりの事なり

(一)秀吉鎌倉の鶴ヶ岡に詣て八幡宮の戸を扉を頼朝の像を  
見らしめしが脊中を打ちし微賤よりやて日本を掌に  
握るなり我と伊とて二人あり然も頼義父子鎮守府



將軍とて東國の者ども久しく親しく多うりてビルコ蛭ヶ小  
島より兵を起されしは関東の靡き後へもイハ謂まきたまは  
おとど我ハ土民の中よりカクニホシ期日本を思ひの傳よすんコウナホバ功尚  
高しといふべしといふれり

(一)秀吉陸奥へ趣く時宇都宮よて佐野天徳寺を呼ヨボ

野別佐野幸沢山の城主佐野小太郎藤原宗綱天平  
三年討死して子なり家臣連判の起請文を小田原に  
送り氏政の弟氏忠をめて家を継宗徳が伯父天徳寺  
伯ハ佐竹の一族お申をえて佐野の家を嗣人とすれど  
も是を司ひも了伯小次郎り京都へ趣き黒谷は閑居  
せしを秀吉小條を伐る時々導とせしれり

物語させしき聞かす武田上杉の弓箭盛なりし事也  
久しハ秀吉冷笑ひいふ天徳寺謙信信玄といふ坊主も  
疾死ししを幸たれ今よなき居ハ一人ハ薙刀をか  
しげをせ一人ハ吾輿の先ある柴筆を拵せし馬のたよ  
召具もべたる此世よなきはバ力なり何糸車がり坐備  
とまなむとらやなりとぞいふまじき

○秀吉陸奥へ趣き蒲生氏郷は八十万石の地を賜りり

氏に退出し柱は倚かりて深くを山崎の某居寄て  
辱く思ふ事なりしはひしは氏郷私語て吾都近  
き所よて小き國一ツ廻りて終ふ天下は旗を揚らんよを都小  
棄られしハ何事ら仕出さざ志のやしく成るふり



ておぼえに侯の流しよとぞ後せんらる

○天正十八年奥州葛西大崎一揆の時氏郷名生の城よりあり

會津小飛脚をもて鉄炮の玉茶を人よ見とぞめられど

やうを計りて運び来まると下知せられり山伏をかき

ひ笈の中よ玉茶を入て頭中螺貝杖を携て湯殿山へ詣

ありさゆりて送り送り浦生左文が謀たり

○蒲生氏郷笠井大崎よその軍よ佐久間備前内膳兄弟

を先陣とせらるる下知せし事氏々の心よ叶りて此兄

弟ハ元秀吉よ属せりが秀吉より氏々よ賜り侍大将

氏郷明日の軍ハ神田修理外池信濃守野左内浦生源

左邊の等先陣せよ佐久間兄弟ハ見物せよとぞ下知せられ

る先陣の士大将六人相集り佐久間兄弟の軍立ありきとぞ

羽佐よりぬおのく討死しし事已が羽を捨て只汚名を

出さるるやその事少く斯仰を兼りてかひもたうてはけ大

將の恥辱なり然らば進退の節内たる一廿八はふは

とぞ先陣の軍兵を打具一平野よ押知りかけ引のなる

五度よ及びばもも尚調に六人そとぞ明日は軍ハ

大事なるを思ふ列しよ及びぬよ人々の進退の

調りどいふも能心得りと再三詳に申せよおれを取

下知せし進退節よありしはさるる明日の軍ハかり

終たると悦びいさみ果て敵を切らひけ大勝を

得たり浅野長政秀吉の命より陸奥國よありしは

九ノ十五







松坂十二万石なりしが後今津を賜ふるとき時ハ四十才の頃  
なり佐々木兼頼が子四郎太閤の時僅二百石与へ太閤の吐  
け席小呼がされしが伏見まで太閤の前より退出する時  
氏之昔の故は四郎が刀を以て従ふ事となり又安立郡小  
川あり向ふは黒塚なり安立ハ氏之の領地なりし小黒塚  
と伊達政宗の領地なりしと争はるる小氏ハ平道盛  
の歌よ

みらのみ安立が東の黒塚におもひをわたりしよ  
とらめ事なりしといふ事されし小黒人黒塚ハ安立が東  
は属しし事分明なりしと政宗争ひをやめてり

○本多中務大輔忠勝上総の小瀧十万石を賜はりしは

小瀧は趣き土岐彈正少弼頼定入道慶山岸の寺どもを呼出  
しし縁とへしり彈正の同公万喜の城は居しを世ハ万喜  
少弼と称しし武勇の譽有し人なれば此を問ふ事ハ  
万喜常小房州外里見義高と号するをたれが敵を念らせ  
ん小舞臺を設け踊りをもせ城門を明らしめて果さ  
し船着のけりしきを平しし里見が於木大膳時綱を来  
船より上り時義岸城をかざりし紙旗を結の旗は二之橋  
とひし古き門より不意に折て出忽切崩しまじり是  
より土岐が地は攻入事なりしと語りし事ハ忠勝が土  
岐ハ甲越の両雄将も劣らぬ人なりしと稱し其後旧土  
其家のものを問時ハ必万喜後とぞいれり



○勝頼亡びて後 東照宮甲斐と治めりしは法度ハ信玄  
より用ひし如きを改易し事たりし年貢ハおく納人と仰出  
ましうば百姓大に悦びらり小田原亡して後其地を治  
めりし又同ノ諸民大に悦び数百年の恩義相結べし  
お同ノかりた

○同ノ以 東照宮武田家の士横田甚右衛門等を召く  
信玄の事ども抱くさせし口口口時清坊は時  
火繩ハいふしと清尋あり柿の漬よ石灰を入れて火繩  
を染るハ年経ても用らまはんと申は横田又ハ城意菴あし  
は信玄の事をバ法坊と仰有る事ども又武田家より鍬をゆ  
りくはめは敵の肉汁中は鍬の跡らん為るりと申すと申召

士の軍は信むハ其君のおぞし射伏しバ吾軍の利  
とありし後や人を苦しむハ不仁の業とてあれ今  
日より我家の士ハ鍬を堅く結よと仰おされり

○東照宮仰は物具の美麗なるハ無益の事なり又重くも  
もも益なり井伊兵部ハ力もあましく重き物具あられども  
度々も厚くたり本多中務ハさもたうて序も負する事  
もかりし戦ひ易くせんやうを心懸へきたり下敷ハ鉄  
の笠をいせしごとよた急なる時ハ飯をも炊くべしと我

鉄の笠ハ甲州も下敷ハ  
よハたうりし小丹州龜山の小野木縫殿助足利下乃  
者小鉄の笠をいせしとあふ其以ハ少丹木笠といひけ



ことたり

○東照宮関東清打入の後甲州を造るハカリ秤を造るツクち随兵三郎といふ者井伊直政よりて関東黄金白銀等を高賣すカクるよ定サカまらざる秤を用モテひられん事を教ネガひらればそれより今の制テイハ定サマめさせらるるなり

京は後藤徳兼といふ彫物師あり 東照宮関東清

打入の後徳兼より子孫を召マシ々々遠國を嫌キラひし後

藤庄三郎といふ人として関東より電チヨウせられしは

後天下を知り召マシバ願ネガひのつ叶ハへしとて何ナニもぞ易ヤスき

事よと仰オホ有リしはハ黄金を四ヨつふ切キリく通用ツトヨウせざるやと屋

々々り果ノしては内 東照宮は歸キりれば庄三郎が

志ココロのこぞく仰オホ出デされル事より今の壹イチ歩フ金キンといふは始ハジま

まタり但タし甲州は八信玄の時基石ゴイシキンをといふ物ありしは

夫ソレより前ミマは基石ゴイシキンの外ソトはハたタりし一イチ歩フ金キンを基

石イシ金キンに效ナラひし事コトもやいふべし又信長ノブナガの時今の弁ベン雷ライと

いふりのハ安土ヤツトより始ハジまれり平ヘイをいふは小芋コイモやその中

よいくを色イロ々の物入モノイらえんとし人信ヒトシンせさるるたといへり

狭箱ハサバコも同じに造ツクり始ハジめしりといふ又大坂オオサカの津田ツツタも

守始モリハジて造ツクり出デはともいへり

○原吉丸酒井金三郎共トモに 東照宮の近習キンシユは仕へ申マシたり

伏見フシミより清庭シヨウテイ不出デさせし時原清太刀ハラシヨウタチを拵ツクり庭ニハより

草履カサヅリもくよ違ヒたタりク跣ヌグみク蒔石マキイシれ上ウヘより有アりク酒井サカキ茶



履をおくへんはまはバ人々を憐れんとすし召子細を御尋らう酒  
井兼正原ハ元下徳の笛井の城主原一部が子よては臣が先  
祖原よ仕へしとすうぬ昔れ主君のゆり既して炎天よ居  
しつを思ふ不堪りゆいとやられバ本を忘まごらるの士あり

吾子孫中もめれなごへしと大よ御感あり

○秀吉大坂ゆく馬揃の時千貫矢倉小上り御くまごしよ黒  
き馬の太くきりくちたよ乗て紅の沓を後輪よ付く老  
ら何老ぞと問ふ徳川家の士成瀬小吉なりと申  
祿はいふと問ふよ 東照宮二千石与へまごらうと仰ら  
まごしよ秀吉あはまご五よ奉公せハ五万石与ふべきといま  
しよふやな 東照宮成瀬を召く志づくの事ありま秀

吉よ仕へちんやと仰まぐれば成瀬兼正らハ御情あり  
よいと申はいやとよ汝秀吉よ奉公せば我為ふもよあり  
なんといわれし小成涙涙を流し不肖の身祿を貪りて  
主君を捨ちん者と思ふらるるを知らりくも愚よ公疾  
自害し心をおうさん抱をてやられ共しを秀吉小  
御お後有らう後よ 東照宮長位あまご召まご古よ  
三尺の孤を託まごまといひ一人ハ成瀬よてこ持あまご  
仰らまごらう小吉正成後隼人正といひ一あり

○小條家亡く後 東照宮甲斐相摸の塙三塔嶺を御歩  
おりの時るし永祿年中此戦場を御覧ありまげ山あり  
し信玄兵を御通しきまやすく軍小勝しなり小條家



武畧小拙く山林を伐めしきるをぞか一生茂るる

みいりて信玄陣を志くべた山を林小せよし仰出されり

○秀吉伏見よりしる日廣間小知れし五腰の刀を以て

試よ其名をいんんとてけしきりし小違ハざりしれバ前田

以誠よ神智のおりしよとてけしきりしれバ秀吉は笑く

何の子細もなれどよ秀家の美麗を好むが故よ黄金

をちりむめしる刀を是るる一景勝ハ父の時より長剣を好

めり寸の延きる刀を是よあてしり利家ハ又た是と云

し時より先陣後殿の武功よより今大國を領されども

昔をとりすれど草巻し柄の刀是他此主よ罪むと思へ

ア輝元ハ異風を好む事ある体よかざりし刀を

らん江戸大納言ハ大勇し一剣を頼むの心あり  
兼光ハ又義廉もなる刀其志し叶ひきりし  
しる小違ハざりしりし江戸大納言とハ 東

照宮の御事なを

○謙信の許よ赤小豆粥竹俣兼光谷切とて三の刀あり竹俣

兼光ハ越後の百姓持しりしある時山中を通りし

雷烈しく鳴きりしバありや落しりし刀を抽

頭小指目をもろ居しりやありし空晴し刀は鋒

より血流ま殷よそみり又或時大豆を袋小入てゆさ

よ袋の綻びより一粒づらちりし鞘小しりて二

しりバ怪しき刃しりし鞘のしりて刃の終ふ如きりし



アノ多クナリ双刀とて竹俣三河守乞得レテ謙信後ハ  
弘治年中川中島合戦小信玄の兵輪形月平  
大夫といハル者鉄炮をもて秘シヒリを徳信馬を乗寄せ  
一刀切伏スルかけ通ラレタリ後又甲斐の兵ヨリ是を思フ  
小輪形月ハ物具かけ切をも持ツ一兩箇ハ二の見通の上  
より切放シテリといハル事刀小くかくハ切マシトイハル事  
則カノ兼光此刀ナリト云々景勝の時京ヨリ研セシを越後ノ  
て人々ヨリ見セシキ京の水小く研サレバ銚の光は又勝まじ  
と悦マシテ三河も熟シト云々此ハ贋物ナリ子細ハ此刀  
をも手ヨリ上ニ背小テ毛ハ通ズべき計の穴ハ此を教人  
外ハハナリト云々此刀ハバトテ竹俣を京小やりてはぐり求

真の兼光此刀を清水の南坂より取出レテ石田三成  
告テ贋物ト云々老十三ノ日の岡ヨリ死刑セラル竹俣  
越後ノ持御リテカノ穴ハ馬の毛を通シテ糸線ヨリ見セタリ  
其後此刀太閤小奉ル秀頼ヨリ落武者云々和泉河内の方  
行キヨリと聞クバ此刀を献スル者ハ黄金三百枚給  
ベシト仰出サレテ其行方終ル知ルナリ

○本庄越前守繁長ハ越後の勇将ナリ後景勝上杉十郎憲  
景ガ禄を本庄ヨリ与ヘラズ本庄如おの庄内大宝寺義貞ハ我  
猶ク二男子勝丸ノ庄内を与ヘタリ本庄最上義光ト出羽の  
十安ガ表ヨリ軍云々討最上は軍敗小セシ小義光乃十  
大将東漸寺右馬頭口傍ヨリ首一ツ提ク



越後の兵は紛も繁長を目よかけく只今敵の大將を討  
以実檢よ入まきんんと云く馬は鐘を合せかけきて正宗の刀  
を以て曹を打つ明珍の曹なりりハ筋四ツ切削りて繁長  
右の腕を切く落し首小添て景勝小出りり刀をばお座ふ  
刃へ手へらりり後故りり東照宮の侍刀とるり本庄正  
家とりりハ此刀なり

○加藤嘉明の曹ハ形を富士山よ造りて名をも別富士山と  
りハ具之の胸ハ天人のすふふとて蔭繪よとり竹中重  
治ハ曹ハ一の谷明智秀俊ハ曹ハ二の谷とりハ横州一ハ谷二の谷お  
並べり又柴田伊賀守勝豊ハ曹ハ鉄蓋ハ峯とりハ是ハ一の谷よ  
アとく侍りり山をまばり名付りりやば竹浦野若狭ちり

コスイキウシロカナガミサ オホスイキウヒホノ  
小水牛黒田長政の大水牛日根野ハ唐冠の曹原隠岐ちり十五  
頭福島正則の四まゝ鹿の角本多忠勝の佐藤四郎ハ曹蒲生  
氏郷の銀ハ鯨尾伏木久内ハりり鈴武田信玄ハ諏訪法性秀  
吉のハ日此月加藤清正の長鳥帽子矢田作十郎ハ鯉の曹藤堂  
秋七ハ帽子たどいりり多ハ細川忠貞ハ山鳥ハ尾の曹といり  
も名高ハ関ヶ原の軍よ忍具ハかハ山ちの尾ハ曹と著銀の天  
衝の指物なりりハ遠よ見て唯舞鶴ハやハ小有りり  
東照宮曹と指物と映あひく面白ハりり乞得ハせりり  
台徳院殿よちりりせりり

○信長江州小谷の城攻小伊藤七藏先ハけりりちりり小從者  
付りり上帯きりりて刀も腰差も堀下よ落つ七はりり



ひらきまは乗込で柵の木をたて敵三人出さず伏せ功名しり

○七藏父を君侯とす相州の人ゆく武者修行し尾州前田村

に居り信長に呼ばれり七藏尾州二本木の軍に事急

りして編み立をわづらひて一番鎗を合せり信長大に賞

賜りて編み立と呼まじり後秀吉ふ仕へてなぐ功名あり

うは紫袖井筒の紋度袖の小袖を与へらまじりれば甲の上よ

しり秀吉の旗奉行とぬり

○井伊直孝はいもく人毎に具足櫃を扱き早くえ出に志

を用意せり老ありえおひも遅きやぶの事あり何れも素

肌をかくかけ付くことよき具足を著しと急事との差お

かりたりありと申されり

常山紀談卷之九 終



